

# 民俗学と子ども研究

—その学史的素描—

- 一 問題の所在
- 二 柳田國男の子供理解
- 三 柳田以降の民俗学の子供研究
- 四 子供の民俗学

## 論文要旨

日本の民俗学は柳田國男のほとんど独力によってその全体像が作られたと言っても過言ではない。従って、民俗学のどの分野をとってみても、柳田國男の研究成果が大きく聳え立っており、現在なお多くの研究分野は柳田國男の学説に依存している。民俗学の研究成果として高く評価されることの多い子供研究も実は大部分が柳田國男の見解を言うのであり、柳田以降の民俗学を指してはいない。そのような高く評価され、実証済みの事実かのように扱われる柳田國男の見解を整理し、問題点を指摘し、それに続いて柳田以降の民俗学の研究成果も検討した。

柳田國男の子供理解は大きく二つの分野に分けられる。一つは子供の関係する行事や彼等の遊びのなかに遠い昔の大人たちの信仰の世界を発見するものである。子供を通して大人の歴史を明らかにする認識である。これは手段として子供を位置づけていることになる。この子供を窓口にして大人の過去を見る場

合は、「神に代りて来る」という表現に示されるように、例外なく信仰、さらには靈魂觀と結びつけて解釈している。もう一つの柳田の子供研究の世界は「群の教育」という表現に示される。群の教育は近代公教育を批判するものとして注目され、教育学系統の人々から高く評価される視点であり、柳田以降にもほとんど疑われることなく継承されてきた。しかし、この視点は子供を教育の対象と見るもので、大人にとって望ましい一人前に育てる教育に過ぎない。

民俗学はこれら柳田國男の呪縛から解放されなければ新たな研究の進展は見られないことは明白である。子供を大人から解放して、子供それ自体の存在を分析し、子供を理解することによって新たな民俗学の研究課題は発見されるであらう。

福田 アジオ

## 一 問題の所在

民俗学以外の学問が柳田國男の論著や民俗学の研究を参照して自己の研究の基礎に置いたり、課題を設定したりすることは珍しいことではない。特に柳田國男に依拠することは一つの常套的な手段と言ってもよいであろう。柳田國男論としての研究以外に、自己の研究の問題意識や課題設定の表明に柳田國男が登場することは多いし、また柳田國男の論著を読み解き検討することを研究のテーマとすることも少なくない。分野対象によっては、それらは民俗学内部からの研究よりもはるかに多い。

その柳田國男あるいは柳田國男に依拠した民俗学の研究成果を取り上げ論じることが盛んな分野の一つが教育学・教育史である。<sup>(1)</sup> 民俗学の成果を手がかりに日本の教育のあり方を再検討しようとする問題意識を表明し、柳田國男の論著を民俗学の成果として活用するのがしばしば見られる作法であり、また柳田國男自身の思想や認識と共に彼の子供認識や教育論を論じるスタイルも多い。しかし、その多くが柳田國男と民俗学を必ずしも自覚的に区別していない。またしばしば柳田國男以外あるいは以降の民俗学を視野に納めていない。柳田國男が記述したことをほとんど検証抜きで民俗学の研究成果とし、柳田の見解、解釈、説明を日本の歴史上の子供のあり方、教育のあり方として証明済みの事実かのように扱っている論文が多い。

ここでは柳田國男の研究成果と彼以外および彼以降の民俗学の研究成果

果を区別して整理し、跡づけて、民俗学における子供研究の特色と問題点を検討したい。

### 二 柳田國男の子供理解

#### (1) 神に代りて

柳田國男には多くの著書論文があり、その大部分は『定本柳田國男集』全三十一巻（別に別巻五冊）あるいは『柳田國男全集』全三十二巻に収録されている。そこには子供を扱った論文も少なくない。子供を表題にした著書もある。『こども風土記』（一九四二年刊、『定本柳田國男集』第二一巻所収、『柳田國男全集』第三三巻所収）と『村と字童』（一九四五年刊、『定本』『全集』とも同巻）である。前者は子供の遊びを扱い、後者は疎開児童を読者に想定してムラの生活事象について述べたものである。むしろ、この両著は子供向けに執筆したもので、子供を論じることと主目的があつたのではない。子供そのものについて考察し、論じた論文や著書は別の形で発表されている。そのなかで柳田國男が注目し、取りだした子供の問題は二つであつた。一つは子供の役割と意義についてである。他の一つは子供のシツケや教育に関するものである。この二つの観点は柳田が考えた時期が異なり、前者は主として一九二〇年代であり、後者は専ら一九三〇年代に発表された文章に示されていることに注意しなければならない。<sup>(2)</sup>

前者については随所に登場するが、その見解を集中的に見ることが出

来るのは『小さき者の声』（一九三三年刊、『定本柳田國男集』第二〇巻所収、『柳田國男全集』第二三巻所収）にまとめられた各論文である。

特に最初の方の「童児と昔」（一九二四年）、「神に代りて来る」（一九二四年）、「小さき者の声」（一九二七年）はそのことをテーマにしていると言つてよい。それらでは、子供たちの遊びに注目し、また子供が神事祭祀に活躍する例の多いことに注目し、そこに子供の資料としての重要性を発見している。その中心的な部分は、例えば一九二四年に『教育問題研究』誌上に発表した「童児と昔」で「かごめかごめ」という子供の遊びを取り上げて論じている。かごめかごめは現在の若い人でも幼い頃に経験したことがある遊びであろう。子供たちが円形になり、その中心部に一人の子供が目隠して座る。円形の子供たちは、手をつないで、歌をうたいながら廻る。歌は「かごめかごめ、籠の中の鳥はいついつ出やる、夜明けの晩に、つるつるつーべった」といい、最後にいっせいにしゃがみこんでしまう。そして「後の正面だーれ」と問うて当てさせる遊びである。それを「やはり古い社会相の一つの写真が、ぼやけて今に残っているものとして珍重すべきです。」<sup>(3)</sup>とし、さらに続けて次のように述べている。

我々が昔何の心も付かずに、次の子供に引き渡しておいたこれらの遊戯は、こういうなつかしい先祖の記念であつたのです。詞などの地方によって相異のあるのも、何か隠れたる意味がありそうです。<sup>(4)</sup>このように、現在はほとんど無意識無自覚に子供たちが遊んでいる遊びが実は遠い昔の大人たちの行っていたことを教えてくれるとする見解

はほぼこの時期に始まった。柳田國男の民俗学研究のなかでも比較的早い時期に獲得された認識と言えよう。そして、子供が教えてくれる大人の過去は専ら信仰であり、神の存在である。これは、一九二七年に発表された「小さき者の声」の中でよりはっきりと指摘される。子供たちの盆釜その他の野外での炊事についての次のような文章である。

察するところ以前は村々にこれと似た神事があつて、信仰の衰微とともに年とつた者はこれに与らず、ついにはこれを支持することを廃したために、小さい人々の永くその興味を忘れ得なかつた者が、形ばかり繰り返して遊ぶことになつたのである。<sup>(5)</sup>

そして、一九三五年発表の「子供と言葉」の次のような冒頭の言葉になつて明確に示されている。

小児が我々の未来であるとともに、一方にはまたなつかしい眼の前の歴史、保存せられている我々の過去でもあつたことは、国内各地の言葉を比べてみると、自然に誰にでも気がつきま<sup>(6)</sup>す。

子供の現実の世界に大人の遠い過去の世界を発見するのである。<sup>(7)</sup>しかも、その最も明白な表明は、かつての大人が信仰していた事柄が、信仰心の衰退によって行われなくなったのに対して、子供が真似をして行うことで、遊戯化した遊びとして存続してきたというものである。子供は形式的に遊びとして行っているのみであり、その形ばかりのなかからかつての大人の信仰的な意味、すなわち日本人の靈魂觀を追究しようとする見解である。このような態度は柳田國男の民俗学研究を貫くものである。現在では断片化し、無意味な存在になっているものを通して、過去

の完結した意味ある存在を明らかにするという研究態度である。ちょうど考古学の遺物整理が、発掘された土器片を接着剤でつなぎ、完形品を完成させるように、個別的断片的民俗事象を整理して統合するのである。しかし、これでは子供そのものの認識というよりは、子供を資料として把握することであり、子供を通して大人を発見することになる。これで終われば、子供研究ではない。

遊びとか競技は本来神との関連があったという考えが、このような子供の位置付けの基底にある。『郷土生活の研究法』において、次のように主張している。

舞踊が神祭から生まれ、競技が宗教的起源を持つと同様に、娯楽も元はこの国でも真面目なものである。現在のような遊樂の気持はいささかもなかったのである。たとえばコマ（独楽）は今のような子供の遊びとなる前には、大人が真面目に扱っていたもので、元は犠牲者を定める一つの方法であった。もっともこれは日本固有のものではなくて、外からはいつて来たものらしい。<sup>(8)</sup>

そして、次のように言う。

今はもうほとんど子供の遊びになってしまったオニゴト（鬼事）は、元は神の功績を称える演劇であったのを、面白いので子供が真似して、あんな零落した形で持ち伝えたのであった。それからメクラオニ（盲鬼）やカクレンボウ（隠坊）も、まだそうはつきりした証拠はないが、以前は神事として大人が大真面目でやっていたものと、ほぼ想像できる。しかもかように起源の不明瞭なものほど、そ

れが大人から子供に伝えられた時代の古いことを示しているのである。

これはほんの一二の例に過ぎないが、その他の童戯もみんな以前大人のやっていた行事の模倣であった。しかしそんなことを空に言ってみたってしょうがないことで、我々のやろうとしているのは現在の事実を採集して、これを並べてみた上で、その全体から以前の形を帰納し、それを一つの拠り所にして、古い信仰の姿を明らかにしようとするにあるのである。<sup>(9)</sup>

子供の遊びはどれもこれも無意味なものではなく、本来は神を祭り、あるいは神意をきくための方式だったと言う。それが今の子供の遊びの原型である。そのことは、また別の問題に発展するが、柳田國男はそれ自体が目的となる娯楽、遊び、遊戯等の意義を認めていなかったということになる。遊びはいわば人々の信仰心が衰え、本来の意味が不明になった結果発生したものということになる。これは人間理解としては非常に大きな欠点をもった考えといえないだろうか。人類は恐らく生産と消費に加えて、初発より遊び、娯楽を所有していたと予想すべきであろう。

柳田國男はこのような古い信仰、觀念を形の上で残すものとしての子供という理解に満足していたわけではない。子供が現在の神事や祭礼において大きな役割を果たすことについても十分に注意していた。むしろ、最初は手段としての子供であったのが、次第に考察を進めるなかで子供独自の意義に考えが及んだと言わなければならない。「童児と昔」に続いて同じ年に同じ雑誌に発表した「神に代りて来る」がそれである。ここに

は多くの子供の行いう行事や遊び、子供の参加する行事が取り上げられている。まず最初に小正月の訪問者であるホトホトが登場する。鳥取県から島根県辺りでは、若者たちが藁の牛馬の綱や、銭繒せんじょうを持って各家を訪問して、入口でホトホトと言ひ、各家では盆に餅や銭を載せて出てきて与えるという行事である。

このような貰いものをする小正月の訪問者は各地に出現する。九州では、子供たちが小正月に各家を訪れるトベトベとかタビタビと呼ばれる行事があるが、この呼称は「給べ」という言葉から来ているという。このような行為は小正月のときだけではない。日本各地の同種の行事を紹介した上で、柳田は次のように述べている。

後には単に物を貰うためのみにあるくようになりましたが、以前は御覧のごとく、家々にとつてかなり大切な、その幸福のために欠くべからざる任務を尽くしたので、物はこれに対する報酬に過ぎなかったのであります。<sup>(10)</sup>

そして、メラネシアのズクズク (duk duk) を取り上げ、また沖縄八重山のアカマタ・クロマタ (旧六月の豊年祭の二日目に登場する仮面仮装の神。特に西表島古見が有名) を紹介した上で、人間が神となることがかつての本質であり、それが変化したものが餅を貰い歩く子供たちだとした。そして、最後に以下のように述べている。

七歳になるまでは子供は神さまだといっている地方があります。これは必ずしも俗界の塵に汚れぬからという詩人風の讃歎からではなかったのです。亡霊に対する畏怖最も強く、あらゆる方法をもつ

て死人の再現を防ごうとするような未開人でも、子供の霊だけにはなんらの戒慎をも必要とせず、むしろ再びすみやかに生まれ直して来ることを願いました。これとよく似た考えが精神生活の他の部分にもあったとみえまして、日本でも神祭に伴なう古来の儀式にも、童児でなければ勤められぬいろいろの任務がありました。(中略) 小正月の晩にホトホトと戸を叩いて、神の詞を述べ神の恵みを伝える来る役も、夙くから子供にさせた地方はあったので、必ずしも青年がもとはしていたのを、後に幼い者が真似たのではないかも知れませぬ。<sup>(11)</sup>

反省をこめて、子供の本来の性質としての神との親近性を説いているのである。大いに注目すべき論点であろう。柳田にはこのように、年中行事や祭礼神事と子供の遊びに連続性を見る立場と、神事祭礼や年中行事における子供の神性から来る担い手としての面の両方を考えていた。そして、その場その場によって、どちらかが強調された。どちらにしても神事祭礼あるいは年中行事との関連での子供の意義を考えたもので、「古い信仰」を示すものなのである。その点では、柳田国男の民俗学の中心部分に子供は位置付けられてきたと言える。

## (2) 群の教育

柳田国男が論じた子供の問題の二つめは、大人になる過程での一人前への教育・訓練についてであった。これは専ら一九三〇年代に展開したが、柳田国男の子供についての問題意識に変化があったのであ

る。その変化は経世済民の学としての民俗学を確立させようとした三〇年代の彼の使命感と対応している。その内容を一言で表現すれば「群の教育」ということになる。近年の教育学がしばしば重宝がって使用する用語である。柳田國男は近代の学校教育以降にのみ教育があるかのよう<sup>(11)</sup>に説く考えを批判して、村落社会においても教育が行われ、それによって人々は立派に一人前になっていたと主張した。「郷土研究と郷土教育」という一九三三年に発表され、後に『国史と民俗学』に収録された論文に次のような文章がある。

郷土教育がもし文部省の考えるごとく、今後新たに追加しなければならぬものだったら、以前はかえって村々でそれを行っていたのである。学校は炬のほとり緑樹の蔭、または青空の下であり、教員は目に一丁字なきちよん髷の故老であり、教科書は胸に描く印象と記憶とではあつたけれども、その頃の青年はほぼ一人残らず、覚ゆべきことを覚え学ぶべきことは学んだのみならず、年を取るにつれてさらに自身がまた教師となつて、教材に若干の補充改訂を加えつつ、次に生まれて来た者を教えていたのである。いかに道理のわからぬ人たちだとしても、これをしもお国民の教育でなかったと思つたものは、よっぽどどうかしている。<sup>(12)</sup>

そして、この種の教育のうち、特に力が注がれたのは道德教育であり、「そうしてこの方面に限つては、家庭以外の団体の力が、ことに意識して最も多く働いていたのである」<sup>(13)</sup>と指摘した。これが「群の教育」である。

「昔の国語教育」という論文がある(『国語の将来』所収、一九三九年)。これは一九三七年に『岩波講座国語教育』第五巻に発表したものであるが、そのなかの第三節に「群の力」という見出しを付けている。そして、子供の日本語教育について種々の問題を論じているが、その一つが子供たちの仲間に入ることに伴う教育機能である。子供は生まれて以降しばらくの間は家庭で教育される。しかし、それが学校教育以前でもずっと続けられる訳ではなかったことを指摘する。「群の力」は次のような文章で始まっている。

ただしこの親切を極めた指導期間は、通常の家庭ではそう長く持続することができない。やがて第二の緑児が家の裡で啼き、または老人が衰えて行つて、抱きかかえが懶<sup>もろ</sup>くなつて来る。その前に早くその児を近隣の子供の群に、引き渡してしまわなければならなかったのである。この長幼の連絡は、今でも僻村の通学生などに見られるように、自然に古くからよく整っている。(中略)

子供組の制度のまだ明らかに残っている地方でも、その加入の期日を就学の際と、一致させようとする傾向があるために、それより以前の児童は淋しくなり、群としての教育力は著しく衰えているように思われる。<sup>(14)</sup>

子供という人生の段階は、群の力によって教育され、その結果として一人前になるのである。この群の教育機能を非常に高く評価して、近代学校教育に對置している。教育を近代の制度としての学校教育に限定しようとする大方の理解に鋭い批判をしているのである。「群の教育」に

については、柳田は随所で語っているが、直接その問題を展開した論文はないと言ってよい。言葉の教育、挨拶の訓練、さまざまな道徳律のしつけを取り上げた中で群の力を大きく評価している文章が多い。

子供そのものとは言えないが、教育について論じた柳田の文章としては一九三八年に発表された「平凡と非凡」(『定本柳田國男集』第二四巻、ちくま文庫版『柳田國男全集』第二七巻所収)がある。取り上げているのは青年教育であるが、そこで教育を二つに分けている。すなわち次のようにである。

(前略) 最近の百年、もしくはせいぜい百五十年ほどの間に、かなり顕著なる一つの転回期があつて、その余波がなお今日にも及んでいる。それはどういう風の変革かという点、手製の語で言えば「教育群」の分裂というものが起つて、同時に二通りの青年の訓育法が、両々併立して行われるようになったのが大きな出来事であつた。その二通りの一つはもちろん前からあるもの、第二の新しいものは書物を読むことをもって特色とし、そうして他の一方の古くからのものを、平凡として軽蔑することが教えられたのである。幸か不幸か私などもこの第二の群に属してゐた。<sup>(15)</sup>

そして、この両者の教育法の相違を平凡と非凡ととらえて説明した。

いちばん大きな教育法の相異は、具体的にいうと、平凡と非凡とであつた。平凡を憎むという人の気質は、必ずしも新たに生れたものではないが、それが教育の上に公認せられたのは近頃のことであつた。家庭がもしも教育の主たる管理者であつたら、利害や必要は

あるいはもっと早く、この方針を採用せしめていたかも知れぬが、いかんせん前代の青年教育組織においては、実は親々は極度に無力であり、群それ自身はまた常に完全に平凡を愛していたのである。<sup>(16)</sup>

群教育としての青年教育について、その特色を笑いの教育であると説く。過失を犯した者に訓戒をすることで逸脱する者を防ぐのであるが、その訓戒は奇抜なものであり、笑ひ者にする方式であつた。それを柳田は「笑ひの教育」と名付けた。人々の笑ひを誘うような気の利いた文句を言うことで批判をし、そして反省を促すとともに、他の人にはそれが教育となつた。諺もその方式であつた。それらで実効があらない場合には、厳しい様々な制裁も行われた。これら全体が群の制裁であり、群の教育であつた。

その柳田の考えをまとめて示したものととして注目されるのが『現代日本文明史・世相史』である。これは柳田が大藤時彦と共著で一九四三年一月に出版したものである。その書名から分かるように、明らかに『明治大正史世相篇』の続編を意図したものである。大藤時彦は自序で次のように述べている。

本書構想の大体を述べると、読者の中には多分読まれた方が多からうと思ふが、先年朝日新聞社が刊行した「明治大正史」(世相篇)の続篇といふ心持で記述した。それはふたつの意味からである。第一は内容に於て、前著に詳述したことは成る可く避け、余り説き及ばなかつた項目に主として意を注いだ。第二に前著の発行された後の世相に力点を置いて見て行かうとした。<sup>(17)</sup>

したがって、この本は柳田國男を論じる場合にも注目されるべき書物であると思われるが、今までほとんど取り上げられることがなかった。

この書物があまり流布しなかったこともその理由かと思われるが、また一つにはこの本が柳田國男・大藤時彦著となっているが、実際に執筆したのが大藤時彦だったためでもあろう。しかし、柳田の意向や判断あるいは見解がまったく入っていないとは考えられない。共著者として名前を出し、柳田の印も奥付の検印欄に捺印されているからである。

その第七章は「教育」であり、その第一節は「群教育」となっている。そこを少し読んでみよう。ほぼ以下のようなことを述べている。

近代の教育制度が学校教育のみを教育と考えることになり、教育という語を狭くしてしまった。教育というものは本来もっと幅広いものであり、生活に即したものだたと主張する。今では文字を読み書きできない者を無教育者とレッテルを貼るが、これも教育を教科書を使用して校舎内で行うものと理解したところから生じたもので、間違いである。教育は人を一人前にすることであり、学校教育が校舎内で教えるのは人生の原則のみであり、その実際方法は郷党教育として存在した。郷党教育は群の必要とする所だけを教える群教育であつたため、群から逸脱していつて天下に活躍するためには不十分であつたが、しかし、教育はまず群教育を基礎にすべきであつた。群教育の特色は制裁によって群から逸脱することを戒めるところにあった。その具体的な方法は①笑い、②俚諺であつた。そして、この群教育の有力な管理者は若者組であつた。

以上のように、ここでも群の教育を強調しているが、その具体的な内

容となると必ずしも明らかでない。笑いと言の教育的機能については柳田が早くから指摘している点であるが、それがどのように行われたかは明確ではない。そして、群教育の担い手を若者組としており、十五歳以前の子供の段階における群教育についてはなんら触れていない。小学校ができてからは、群教育の管理者は教育を学校に一任してしまつて、自らの責任を放棄したとしているが、子供の段階の群教育の姿は何も記述されていない。そこで、次の項に順次読み進んでいくと、「学校教育」、「学生生活」という現代の問題の記述があり、第四節が「児童教育」、第五節が「子供の生活」、第六節が「育児」となつて、この章は終わっている。そこで、どのようなことが述べられているか注目しなければならない。

第四節「児童教育」では、もともと児童は大人の世界から隔絶したものではなく、児童は大人と群行動を共にするものであつた。そこに教育があつた。それが、児童が児童として特別扱いをされるようになり、実生活で特別な責任や役割を与えられないままに成長することになって、社会に出るときに経験不足、知識不足を痛感することになる。研究の面でも、子供の世界を特殊の世界として見過ぎていると批判する。第五節「子供の生活」は非常に短い節である。子供を区切る年齢としての七歳について述べる程度で、子供の生活について深い考察はまったくない。そして、七歳前の問題である育児を次の第六節で述べるが、ここもあまり力をいれて執筆しているとは思えない内容で、背中に子供を背負う文化、玩具の意味について述べている程度である。



『現代日本文明史・世相史』はたしかに『明治大正史世相篇』の続編であった。そこに群の教育が節のタイトルとして登場して説明されたことは注目される。しかし、必ずしも群教育の内容を新しい視点から論じてはいない。従来の柳田國男の記述を要約して述べているというべきものである。

### (3) 七つ前は神の子

民俗学で常識となっている表現に「七つ前は神の子」とか「七つ前は神のうち」というのがある。この言葉は民俗学の研究関心を如実に表わしていると言えよう。七歳までの幼児は神の管理下にあるとか、まだこの世の人間として確定していない不安定な存在であるとか説明され、その神として産神を想定するのである。この「七つ前は神の子」という表現の発見と定着過程は、民俗学の関心の所在を教えてくれる。この表現に相当する説明を初めて書いたのは柳田國男であった。<sup>(18)</sup>すでに紹介したように、「七歳になるまでは子供は神さまだといっている地方がありまして」と「神に代りて来る」(一九二四年)に記している。当時このような表現が報告されていたのかどうかは明らかでない。柳田自身が旅行中に聞いたのかも知れないが、それも確認することはできない。恐らくこの柳田の記事が影響しているのであろうが、一九三七年になり現在民俗学の世界で親しんでいる表現が初めて報告された。すなわち、能田多代子「七つ前は神様」と題する短報(『民間伝承』三卷三号、会員通信)である。これは以下のような文章で始まっている。

青森県五戸地方では男女共七つ前をさう云ふ。日常第一番に神仏に供物する食物を、幼児のだぶこねて先きに食べるとときかぬ時等は、矢張りさう云つて、仕方がないからやると云つてから呉れる。而して其七つ前に死亡した場合は、男女共紫色の衣を着せ(或は青年期の未婚者にも着せる風もある)口にホシカ鰯(ごまめ)を一つくはへさせて埋葬する風がある。<sup>(19)</sup>

これだけの文章であり、この続きは葬儀の順序を記述していて、特に七歳前の子供についての記事ではない。したがって、この記事の内容よりも、表題として掲げられた「七つ前は神様」という言葉が注目されたと言えべきであろう。これに刺激された大間知篤三が『民間伝承』の次の号(三卷四号)に「七つ前は神のうち」と題してやはりごく短い文章を「会員通信」として寄せている。次のような文章である。

前号の能田多代子さんの「七つ前は神様」で思ひ出したが、常陸多賀郡高岡村では「七つ前は神のうち」と言ふ。七つ以下の子供の場合は、大人なら神様に対して不敬になるやうなことでも不敬にならないといふ意味だと謂つて居た。また七つ前の子供が死んだら、近い過去までは縁の下へ埋めた<sup>(20)</sup>と聞いた。

この二つの記事はごく短い事例報告である。いずれも土地の人々が七歳以前の子供は大人とは異なる存在であり、大人と行動規範が異なることを認めたものである。しかし、その表現は、子供は神であるとか、子供は神の管理下に置かれているとか、あるいは子供は未だ他界に属するという解釈ができるほどの内容とは言えないであろう。これが、子供を

神と考えたり、子供の靈魂は七歳までは他界に属し、この世に魂が確定していないという解釈になったのは明らかに柳田國男の先の「神に代りて来る」に結びつけて理解されたからであり、それを決定づけたのは『先祖の話』での生まれ変わりの問題での記述と言えよう。その第七八節「家と小児」で以下のように記述している。

若葉の魂は貴重だから、早く再び此世の光に逢はせるやうに、成るべく近い処に休め置いて、出て来やすいやうにしようといふ趣意が加はつて居た。青森県の東部一帯では、小さな児の埋葬には魚を持たせた。家によつては紫色の着物を着せ、口にごまめを咬へさせた。とさへ伝へられる。ちやうど前掲の立願ほどきとは反対に、生臭物によつて仏道の支配を防がうとしたものらしく、七歳までは子供は神だといふ諺が、今もほとんどの全国に行われて居るのと、何か関係が有ることのやうに思はれる。<sup>(21)</sup>

事例としてはわずかに二例のみの表現が、柳田國男の記述を媒介にして一般化し、民俗学の世界での常識となつたばかりでなく、日本人の幼児についての観念を最もよく示す民俗として広く採用されることとなつた。しかし、この表現を常識とした民俗学は、そのために七歳以前の幼児について、個別の儀礼や親や社会の子供への対処・扱いを判で捺したように同じ解釈の中に押込んでしまった。

果たして子供の世代は七歳を境にして前後に分けられるのであろうか。たしかに現代の七五三に代表されるような儀礼は民俗的に各地に見られるし、「男女七歳にして席を同じうせず」という表現も古くからある。

しかし、七歳で区切ることの積極的な意味については必ずしも明確に論じられている訳ではない。むしろ、近代の学制が学齢を七歳を基準にしたことによつて、その意味を簡単に了解してしまつていふと言ふべきなのではなからうか。

## 三 柳田以降の民俗学の子供研究

### (1) 子供組

柳田國男は総論的に子供を論じたのであり、あまり個別具体的に子供のあり方を検証したわけではない。子供の存在をどう見るかという視角を用意したと言える。その後の民俗学の調査研究ではどのような動向が形成されたのであろうか。基本的には、多くの民俗学研究者の目は柳田國男の第一の視点を継承した。すなわち、神に代りて来る存在としての子供であり、神事・祭礼における子供の役割、あるいは現在の子供の遊びや行為のなかに古い信仰の姿を発見するというものであった。それに對して、柳田が取り上げながらもあまり展開させなかった面に注目する研究も登場してきた。その一つは子供の組織、集団の問題である。一般に子供組と呼ばれる組織があり、それが一定の役割を果たしていることに注目した論文が出されてきた。

子供組というのは学術用語である。日本の村落社会で自ら子供組と名乗った組織があるわけではない。村落社会に一定年齢の子供を組織した集団があることを把握するための用語が子供組である。子供組という用

語を最初に用いたのが誰で、いつかということを現在確定できる材料はもっていない。今確認できるのは柳田國男がすでに一九三三年発表の『生と死と食物』（『食物と心臓』所収）において子供組と表現していることである。それは次のような文章である。

赤子の世に出るには幾つかの階段があった。若者の仲間に入って一人前になる以前、三歳でも五歳でもまた七つの年にも、それぞれに予定の進出があった。今日残っている十一月十五日の神参りもその一部であって、氏神に承認せられるのも、子供組に迎えられるのもすべて「産立て」「産養い」の継統と私は思うが、それまでは多分今回の誕生習俗採集の中には入っていない。<sup>(22)</sup>

ここでは、子供組自体を説明も具体例も紹介しておらず、どのような組織を柳田が頭に描いていたかは明らかでない。柳田の子供組という用語の使用例は大方曖昧である。しかし早くも子供組が当然のごとく用いられている。

子供組がより明確な姿を伴って登場したのは一九三四年から始まった山村調査においてであった。山村調査は全国の山間農村を訪れ、そこで統一した調査項目に基づいて聞き書調査を実施する大掛かりな調査であった。結果的には全国の五十二カ所の山村において調査が行われた。これは村落社会文化についての日本で最初の統一的全国調査であり、民俗学ばかりでなく、社会学等にも大きな影響を与えた。その統一的調査項目は全部で一〇〇あり、一番から一〇〇番までの質問項目として印刷された。それが『採集手帖』である。採集手帖は毎年改訂されたが、その

初年度の手帖の質問項目の第三〇に次のような質問文が掲げられていた。

三〇 子供組は残つて居ますか。

子供組の働く場合。

○他の地方では道祖神祭、天王祭、氏神祭礼、此外にもありますか。<sup>(23)</sup>

この質問文の前には若者組に関する質問が二つ、そして子供組の質問の後には女性の講集団、娘仲間、処女会等についての質問が続く。ここに初めて子供組が登場した。そして、毎年改訂された『採集手帖』のなかで、多くの質問文には改廃が見られるが、この子供組についての調査内容は変更がなく、三冊の『採集手帖』に掲載されている。むしろ、注目してよいのは、後に民俗学において重要な課題となるいくつかの問題は初年度の『採集手帖』には見られず、二年度目、三年度目になって登場している。例えば同族、同族神、屋敷神、宮座等の質問である。それは山村調査が進行するなかで新たに問題が発見され、それが翌年の『採集手帖』に追加された結果である。ところが、子供組は山村調査が計画された初発から一〇〇項目の質問項目に入れられていたのである。

山村調査の結果は一九三七年に『山村生活の研究』としてまとめられ、刊行された。そのなかで子供組に関する調査結果は整理されて、瀬川清子「子供組」として掲載された。その文章は「子供団の活動は年中行事に多い」という言葉で始まっている。<sup>(24)</sup>そして、その事例を紹介しているが、特別な論の展開は見られない。

すでに紹介したように、柳田國男も子供組という用語を使用している。

最も早く使用した例は先に紹介した一九三三年発表の「生と死と食物」においてであったが、一九三七年発表の「昔の国語教育」でも子供組という表現が見られる。これは、山村調査の成果を確認した時期での使用例であるから、瀬川清子の報告を前提にしていたかもしれないが、やはり曖昧な使い方である。柳田が、子供組を具体的に説明すると共に、その意義について述べたのは一九四二年刊行の『こども風土記』においてである。そこでは「こども組」という見出しが付けられている。この項目に到るまでにさまざまな子供たちの集団行事を取り上げている。「こども組」の前の項目は「左義長と正月小屋」である。さて、その「こども組」は以下のような文章で始まっている。

正月小屋の中では、おかしいほどまじめな子供の自治が行われていた。あるいは年長者のすることを模倣したのかも知れぬが、その年十五になった者を親玉または大将と呼び、以下順つぎに名と役とがある。去年の親玉は尊敬せられる実力はなく、これを中老だの隠居だのといっている。指揮と分配とはいっさいが親玉の権能で、これに楯つく者には制裁があるらしい。七つ八つの家では我儕な見ても、ここへ来ると欣々然として親玉の節度に服している。これをおらしくもけなげにも感ずるためか、年とった者は少しでも干渉せず、実際にまた一つの修練の機会とも認めていたようである。<sup>(25)</sup>

ここでは、柳田は子供組の制度内容に注目している。内部に年齢による秩序があり、統制が行われていることを指摘し、さらにこれに続いて子供組が若者組に接続していることを述べている。一九三〇年代の確立

期の柳田の民俗学が社会的問題に関心を示し、さらに山村調査がそのような方面の資料を蓄積したことがここには反映していると見てよいであろう。この観点はその後の子供組理解に大きな影響を与えたものと思われる。

山村調査で子供組が取り上げられたことが一つの刺激となったのであろう。その後、各地の子供組の調査報告が出されるようになった。その早い例としては、高橋文太郎「下野古里村に於ける子供組行事」(『民族学研究』二巻三号、一九三六年)であろう。比較的早くからこのように子供組という用語によって、子供たちの集団行事やその組織が扱われてきた。しかし、それをどのように理解するかという点ではあまり進展はみられなかった。事例のみが集積されていった。

他方、長野県の小学校の教師として郷土教育の活動の一環として、子供たちに自らの生活を調査させることを独力で行った竹内利美は、一九三四年にその最初の成果『小学生の調べたる上伊那川島村郷土誌』を刊行した。そして、つづいて一九四一年に『信州東筑摩郡本郷村に於ける子供の集団生活』を出した。これらの成果を基礎にしてその後竹内は子供組について独自の見解を表明する数少ない研究者となった。子供組についての研究は竹内の独占するところとなったといっても過言ではない。これらの成果の基礎の上に立って、子供の集団組織をテーマにした論を「子供仲間と青少年団」(『ひだびと』一〇巻一号、一九四二年)として発表した。そして、戦後になって子供組に関する最初の総括的論文「子供組について」を発表したのは一九五二年のことであった(『民族

学研究』二二巻四号)。そこでは、子供組の特質を三点に整理した。第一は、子供組は「本来『一人前』でないもの、すなわち集落社会において正規の役割をもたないものの集団」で、「一種の遊戯集団」であること、第二には「その担当行事はなお村々の共同生活の一部として存在しており、その意味では現実的な村の共同生活の分担」であり、第三に「村協同体の inner group としての地位をもち、年齢序列にしたがう組織の中の一環となっている」というものであった。このような子供組理解はその後の通説を形成したと言えよう。

その次に子供組を論じたのは関敬吾「年齢集団」(『日本民俗学大系』三巻、一九五八年)である。関も子供組の集団性に注目し、年齢集団の一つとした。そして、組織としては寛厳二様式があり、前者は加入が比較的的自由で、後者は加入が半強制的で、一定の掟があるものという。また機能面では年中行事・祭礼行事の執行の一部を担当するものである。そして、女子が排除される事例の多いことから「子供組が男性的・秘密結社の性格を多分にもつ」ことに注意している。竹内の把握と大差はないが、特に年齢集団としての性格を強調した点が特色と言えよう。これは当時、年齢階梯制に大きな関心が寄せられ、日本村落構造の類型的把握において、一つの類型として年齢階梯制村落が設定されつつあったことと深く関係している。

竹内、関のまとめ以降の子供組研究に特に目新しい展開は見られない。竹内や関の見解が子供組の通説となっていると見えよう。そこでは子供組を若者組同様に非常に制度的に整った組織と把握し、村落組織の一つ

と見る観点が強調されている。その結果、子供組成員の日常的な仲間組織や活動、あるいは遊びとの関係はあまり注目されることがなかった。村落の年中行事において大きな役割を果たす面のみが強調された。しかし、その活動の機会は何の調査結果を見ても、年間通してごくわずかな日数であり、集団行事に出現する子供たちの活動のみで子供組を把握するのでは、ハレの子供組であり、ケの状態の子供たちの生活との関連は完全に見失ってしまうことになる。しかし、現在のところ子供たちの日常に注目した子供組研究は見られない。もしも日常的な子供たちの活動をも視野に入れて、従来言われてきた子供組を再検討すれば、果たして子供組は存在したのかという疑問が浮かび上がってくる。現在となつては日常の子供たちの活動や遊びを民俗として把握すること自体が難しく、そのなかに子供組との関連性を見ることは確かに困難なことである。しかも、その子供の集団行事はこの数十年間の間に急激に姿を消してしまったし、子供たちの日常も学校と塾との往復であり、あるいはテレビやファミコンの前に釘付けになる毎日である。子供たちの生活自体を子供組の視点から把握することをさらに困難にしていると言えよう。しかし、すでに過去の存在となってしまうから、それを再検討する必要があるというわけにはいかないであろう。

## (2) 育児としつけ

柳田國男は『郷土生活の研究法』(一九三五年)において、「誕生したばかりの子供に対して、人間界への加入の承認が行はれることで、謂は

エントランス・セレモニー(加入式)とでもいふか、これが生れてから一回だけでなくだんだん成長して成年になるまでの間に、何回となくかういふ関門があつてこれを通してにはそれぞれ儀式をやらねばならなかつたのである」と記述して、産育儀礼を生まれてから人間として確定するまでの手続きとして位置づけた。同じ一九三五年に柳田國男は橋浦泰雄との共著で『産育習俗語彙』を刊行した。これはその各種儀礼を誕生から七歳の氏子入りまで順序立てて配列し、各地の民俗語彙を解説したものである。また、具体的には一九四一年発表の「誕生と成年式」(後に「社会と子ども」と改題して『家閑談』一九四六年所収、ちくま文庫版『柳田國男全集』第一二巻)で、誕生から始まる儀礼の展開を整理し、社会化の過程を靈魂觀との関連で論じている。この視点はその後永く民俗学の常識として存続した。

そして、民間伝承の会は柳田國男の古稀を記念して各種の事業を計画したが、その一つとして雑誌『民間伝承』誌上で、連続特集号を組むことを計画した。その実施計画は『民間伝承』の九巻四号(一九四三年)に発表されたが、その特集の順番は氏神、誕生、生死觀、鍊成と競技、生産方式、家、社交と協力、祖霊、家庭教育、お祭り、予覓と前兆、結婚という十二回であつた。子供に直接関連する課題が誕生と家庭教育の二つ入っていることが注目されよう。課題の選択が柳田國男抜きになされたとは考えられない。当時の民俗学は柳田なくして自主的に問題を設定するほどに発展していなかった。戦争が日増しに激しくなってきた段階に、柳田國男自身は経世済民の学としての民俗学を考え、社会に貢献

する研究を目指していたことが、このような課題として表現されたものと思われる。そして、翌々月の九巻六・七号に、「共同研究課題」として原稿募集が掲示された。その第二回特集予定の誕生については以下のような課題の問題意識が表明されていた。

新たに出生する児を誰が管理し養育するか、嫁の生家、婚家、村との連関を明らかにし、これを司どる産神が如何なる神か、又生児の男女別或は長子とそれより以後の生児との間には差別があるかを主題とする。

そして具体的に九つの項目が示された。①妊娠の認知、②ハラオビ、③ウブヤ、④ウブガミ、⑤ウブメシ、⑥ウブギ、⑦乳合せ、⑧初外出、⑨氏子入りの九つである。項目としては比較的オーソドックスなものであり、新しい問題発見がここからなされるという予想は必ずしも示されていない。この公募した原稿による特集が予定通り『民間伝承』一〇巻二号(一九四四年二月)に組まれた。そこには三〇の文章が収録されている。大部分は調査報告であり、事例の紹介である。

また、この同じ号に九番目の課題である家庭教育の共同課題要綱が掲載されている。その趣旨説明は次のようになっていた。

古来、我家庭に於ける教育、特に躰は如何に行はれたか。固有の教育の眼目とその方法とを明らかにするを根本義とする。

その項目は次の九項目であつた。

①躰の眼目、②躰と年齢、③躰と性、④躰と身分、⑤躰の機会、⑥躰の分担、⑦躰の種類、⑧躰の場所、⑨躰と口承

そして、これに対する全国からの投稿原稿は、戦争の激化のために『民間伝承』が一九四四年の八月発行の一〇巻七・八合併号で休刊となり、すぐには掲載されなかった。その原稿が陽の目を見たのは敗戦後の一九四六年八月の復刊第一号（一一巻一号）においてであった。その号は特集号としては表示されなかったが、巻頭に柳田國男の「教育の原始性」を置いて、倉田一郎「躰の問題」、山口弥一郎「農村の躰」以下の十三の文章を掲載している。巻頭の柳田の文章は敗戦後に執筆されたものである。そのことは文中の意気込みとして表現されている。シツケの問題を発見したのは日本民俗学であるとして、次のようにその研究の意義を説いている。

だからシツケの歴史を明らかにするといふことは、決して過去日本人の生活を考へることでは無い。未来の百千年にかけて、この一つの教育法をどれだけまで応用し、又効果づけるかといふ問題の爲であり、更に現在の弱点にあてはめて言ふならば、是に環境だの感化だのといふ漠然たる名を付けて、折角千年も二千年も続き又進歩して居る人の育成方式を、何の統一も無く又乱雑なもののやうに、速断せしめない警戒の爲でもある。この一点だけからでも、日本民俗学はもつと苦闘しなければならぬ。<sup>(27)</sup>

日本民俗学の研究は単なる歴史を明らかにするだけでなく、それを通して未来を見えるのだという主張をしている。そして、躰については「あたりまへのことは少しも教へずに、あたりまへで無いことを言ひ又は行つたときに、誠め又はさとすのが、シツケの法則だつたのである」

として、学校教育との相違を指摘している。

民俗学の産育研究は、以上のような動向から明らかなように、一つには出産儀礼とそこに示される神の問題、他の一つには成長過程での躰の問題に集中していたと言えよう。この両者は柳田國男にあってはどちらも重要な課題であった。しかし、その後の研究では後者はそれほど進展は見られなかった。民俗学研究者の関心は専ら出産儀礼とそこに登場する神に集中された。ただし、研究として新しい解釈や仮説を提示したものは少ない。多くは事例を報告するだけのものであり、また柳田説を解説して事例をあてはめるだけのものである。そのような域を出ていないが、産育儀礼全体を手際よくまとめ、そこにある信仰的な意味を述べたものとして大藤ゆき『児やらひ』（一九四四年四月）がある。コチャイは子育ての完了を意味する言葉である。この育児としつけの問題はむしろ教育学とか児童学さらに社会史的な立場の教育史の世界で常に柳田國男の論に学ぶかたちで研究が行われ、多くの成果をあげている。しかし、それは最初に述べたように、柳田國男の論を実証済みの定説かのやうに扱う傾向があり、新たに独自の資料の獲得を伴う論の展開は見られないと言つてよいであらう。

#### 四 子供の民俗学

前節で見てきたように、民俗学は子供に注目して調査研究を行ってきた。その蓄積は決して少ない数ではない。<sup>(28)</sup>しかし、その結果としてどの

ような認識を獲得したかという点になると、非常に寂しいものがある。

民俗学と言っても、独自の見解を示したのはほとんど柳田國男ただ一人というのがこの分野での実情である。子供について「神に代りて来る」

存在と把握し、あるいは子供を一人前に仕上げる過程を「群の教育」と理解するのも重要な指摘であり、注目すべき子供理解である。ところが、

それ以降の民俗学研究にはそのような基本的な視点や仮説は存在しない。多くの子供について記述した民俗学的文献はいずれも柳田説を前提にし

て、ただ事例追加的に具体例を紹介するのみであり、柳田批判の新しい子供像を提出してはいない。

それでは、子供を対象にした民俗学の問題としてはどのような課題があるであろうか。あるいは子供について民俗学に期待する問題として何

があるであろうか。以上のような学史的検討の結果から民俗学としての課題を考えておきたい。

先ず言えることは、柳田の子供理解の呪縛から自由になることである。それは即ち、「神に代りて来る」という子供を霊的な存在と見る考えを

放棄することであり、また同時に子供に遠い昔の大人の信仰の姿を発見するという視点を解消することである。他方で、安易に「群の教育」に

依存しないこともある。すなわち、子供を大人の支配・管理から解放して、子供自体として理解することであり、子供自らの保持する民俗を

通してそれを把握することである。事実、そのような可能性を示す論考が提出されるようになってきている。<sup>(29)</sup>そこには民俗学独自の問題発見の

結果というよりも、フィリップ・アリエスの『人子ども』の誕生』に代

表される社会史の影響が色濃く見られる。その点では他律的な問題発見であるが、民俗学の新たな展開につながる可能性を秘めていることは間違いないであろう。

# 註

(1) 代表的な文献を掲げれば、庄司和晃『柳田國男と教育―民間教育学序説―』一九七八年、同『柳田民俗学の子ども観』一九七九年、長浜功『常民教育論―柳田國男の教育観』一九八二年、等。また、社会史的教育史をめざす『民衆のカリキュラム・学校のカリキュラム』(叢書産育と教育の社会史二、一九八三年)所収の座談会「民衆のカリキュラムと学校のカリキュラム」(鶴見和子・庄司和晃・中内敏夫)や所収論文の田嶋一「民衆社会の子育ての文化とカリキュラム―七ツ前は神のうち―」によく示されている。

(2) 塩野雅代「柳田國男の『子ども』観について」『社会民俗研究』第一号、一九八八年)は、一九二〇年代を中心に展開した柳田國男の子供論を整理検討し、柳田の神観念と子供が強く結びつけられていることを指摘している。

(3) 柳田國男『小さき者の声』(ちくま文庫版『柳田國男全集』第二二卷)三四五頁。

(4) 柳田同書三四五頁。

(5) 柳田同書三九二頁。

(6) 柳田同書四四一頁。

(7) このような柳田の子供理解を、庄司和晃は「過去保存的子ども観」と表現している。庄司前掲『柳田國男と教育』二二―二六頁。

(8) 柳田國男『郷土生活の研究法』(ちくま文庫版『柳田國男全集』第二八卷)一八六頁。

(9) 柳田同書一八七頁。

(10) 柳田前掲『小さき者の声』(ちくま文庫版『柳田國男全集』第二二卷)三五八頁。

(11) 柳田同書三六二―三六三頁。



- (12) 柳田國男『郷土研究と郷土教育』（ちくま文庫版『柳田國男全集』第二卷）五一六頁。
- (13) 柳田同書五一六頁。
- (14) 柳田國男『国語の将来』（ちくま文庫版『柳田國男全集』第二卷）八五～八六頁。
- (15) 柳田國男『平凡と非凡』（ちくま文庫版『柳田國男全集』第二七卷）五四六頁。
- (16) 柳田同書五四八頁。
- (17) 大藤時彦「自序」（柳田國男・大藤時彦『現代日本文明史・世相史』一九四三年）二頁。
- (18) この「七つ前は神の子」という表現の学史的整理とその問題点の指摘を行ったのは塩野雅代である。塩野前掲論文参照。
- (19) 能田多代子「七つ前は神様」（『民間伝承』第三卷三号、一九三七年）。
- (20) 大間知篤三「七つ前は神のうち」（『民間伝承』三卷四号、一九三七年）。
- (21) 柳田國男『先祖の話』（ちくま文庫版『柳田國男全集』第一三卷）二〇〇～二〇一頁。
- (22) 柳田國男『食物と心臓』（ちくま文庫版『柳田國男全集』第一七卷）三七二～三七三頁。
- (23) 『郷土生活研究採集手帖』（『山村海村民俗の研究』所収、一九八四年）六頁。
- (24) 瀬川清子「子供組」（柳田國男編『山村生活の研究』一九三七年）二一六頁。
- (25) 柳田國男『こども風土記』（ちくま文庫版『柳田國男全集』第二三卷）五九頁。
- (26) 柳田前掲『郷土生活の研究法』一六一頁。
- (27) 柳田國男『教育の原始性』（『民間伝承』一一卷一一号、一九四六年）。
- (28) 民俗学を中心とした子供研究の文献については社会民俗研究会編「子どもと社会文献目録」（『社会民俗研究』第一号、一九八八年）が詳しい。
- (29) 最近ではたとえば前掲『社会民俗研究』第一号所収の諸論文や飯島吉晴『子供の民俗学』一九九一年等。

（国立歴史民俗博物館民俗研究部 新潟大学人文学部）

Japanese Folklore Studies and Children  
—A Sketch of the Academic History Thereof—

FUKUTA Azio

It is no exaggeration to say that the whole image of Japanese folklore study was established almost solely by YANAGITA Kunio. Therefore, in every field of folklore, the results of YANAGITA's studies rise high, and studies today in many fields still depend on his theories. Folkloric studies of children, which are often rated highly as the results of YANAGITA's researches, are, in fact, YANAGITA's opinions, and do not point to folklore studies after YANAGITA. The author in this paper puts in order YANAGITA's opinions, so highly rated and virtually taken as if proven fact, points out some problems, and examines the results of research in post-YANAGITA folklore study.

YANAGITA's understanding of children can be classified largely into two fields: One sees in childish events and play, an ancient world of adult worship; it is a recognition that adult history can be clarified through children. This treats children as a tool. This stance of seeing the past of adults through the medium of children is interpreted, without exception, in connection with worship, and with the concept of soul, as shown in the expression "come in place of god". YANAGITA's other world of studies on children is shown in the expression, "group education". Group education drew attention as a criticism of modern public education. It was a viewpoint assessed highly by people in the domain of pedagogy, and it has been handed down since YANAGITA from generation to generation, with hardly any doubts. However, this viewpoint regards children as objects for education, meaning simply an education to raise children into the kind of grown-ups the adults want them to be.

It is evident that no new developments in research can be made unless folklore study is released from these spells of YANAGITA Kunio. It is only by releasing children from adults, by analyzing the existence of children themselves, and by understanding the children, that we may be able to discover new researches themes.